

総評

① 街並み景観部門

第二回を迎えた大田区景観まちづくり賞であるが、街並み景観部門については、応募総数は59通と、初回（72通）よりはやや少なくなっているものの、変わらず大田区の街並み景観に対する期待と関心も高まっていることを感じるようになった。ただ、その関心の高まりと同時に、「大田区の街並み景観とは？」という捉え方自身も多様であることから、応募物件の種類も多様であると同時に、評価の考え方も多様であり、今回の審査は非常に難航した。特に、大田区の景観は、明らかにわかりやすい歴史的街並みや現代建築の連続というよりも、様々な歴史や地形、地域特性などの背景が絡み合うものが多く、そのため、評価軸を定めるのが難しい。

応募内容としては、歴史的邸宅や商店、診療所などの歴史的資源を活かした景観、眺望景観を意識した視点場、現代的オフィスやマンションでありながら、地域のための景観的工夫を凝らしたもの（1階部分の工夫や敷地境界の植栽の工夫）、商店街や店舗が連続する特色ある街並みなど、多くの街並み景観がエントリーされた。ただし、自薦の応募がやや少なかったこと、他薦でも景観対象に対するさらなる「魅力のアピール」（説明）が期待されるという点が課題として残された。

審査過程としては、まず事前の書面審査により評価の高い物件を選んだ上で、第1次審査を実施し、詳細な議論を経た結果12件が候補として選定された。その後、現地視察を行って、実際の様子や環境とのかかわりも確認した上で、最終審査会を実施し、かなり細かい部分までにおよぶ議論を経て、最終的に表彰対象とし6件が選定された。

最終的に選定された物件の内容を概観すると、戦前戦後期における、大田区の台地部における魅力ある高質住宅地の一つのプロトタイプを生み出す「中庭を有するモダニズム邸宅」群や、グラウンドレベルの工夫により小さな活動の街並みを生み出した小さめの戸建住宅、大田区を代表する景観の一つでもあり、宮造りの佇まいや煙突を受け継ぎつつ今でも境界の空気を醸し続けている「銭湯建築」の風景、その周辺の地形や風景とともに長い歴史を刻みながら、現代に至るまで少しずつ風景が積み重ねられ、地形を利用した展望台まで有する神社とその周辺の風景など、非常に多様でかつ「深い」景観、つまり、単に見た目の美しさだけでなく、その景観が抱える歴史や物語、周辺との関わり、現在の暮らしや営みとのつながりなども含んだ評価となったことがうかがえる。

また、惜しくも選外となった物件についても、建物や土木施設が地形と相俟って地域のランドマークとなるような風景を生み出しているもの、隣接する公園等と一体的に考えながら開かれた景観づくりを試みた現代建築、隣接する施設の歴史的資源を自分の景観に採りこんで景観を「継いだ」住宅、工場建築や昭和期の木造和風住宅を使い続けている継承的景観など、魅力あふれるものも多かった。次回以降も、更なる応募と景観づくりの取組みへの期待が高まる。

まだまだ大田区には魅力あふれる景観がたくさん眠っており、区内外の多くの方々に景観的魅力の可能性を発掘していただきたいこと、そして、ぜひ、自ら立ち上がり応募を試みて、その魅力を強くアピールしていただきつつ、どんどん創造的な新しい景観づくりが実施されてゆくことを期待したい。

（委員：野原 卓）

②景観づくり活動部門

景観づくり活動部門も二回目を迎えるが、今回は、応募総数は9通と、前回に比較するとやや少なめの応募であったが、大田区における景観づくり活動の歴史とつながりを強く感じる結果であった。応募内容としては、川や花（桜）や鳥など自然を大切にすべく展開されている景観まちづくり活動やイベント、一見、景観と距離がありそうなエリアにおける民間中心の景観美化活動、地域の資源に対して「地図」や「着物」などのツールを使って豊かにする活動など、それぞれ特色のある景観まちづくり活動がエントリーされた。

審査過程では、まず事前の書面審査により、評価の高い物件を選んだ上で、第1次審査が行われ、ヒアリング調査候補団体として3団体が選定された。その後、現地調査による景観まちづくり活動箇所等を確認した上で、最終審査が実施され、詳細な議論を経た結果、最終的に表彰対象として2団体が選定された。

選定された2つの活動を見てみると、歴史的邸宅の取り壊しを伴う開発計画に対して、区民の積極的にリードによる粘り強い保全運動を経て、現在でも活用される歴史的資源の移築による保全再生に至ったという活動自体の歴史も積み重なる清月庵の保全活動、そして、今一つは、工業地帯という、一見景観から程遠いと思われる場所での、事業者による工業組合が自ら行う、継続的な環境美化活動という、長きにわたる自主的で地道な景観まちづくり活動が高く評価されたことがわかる。

また、選外となった活動の中にも、初回での景観まちづくり賞（街並み景観部門）での評価を基にしつつさらに地域を豊かにするソフト活動へと展開した事例や、地域の歴史的背景のある植樹事業が大きな土木事業の中で継承強化され大きなお祭りにも成長した事例など、豊かな景観づくり活動も見られた。今後も、それぞれの活動において、「大田区らしい景観まちづくり活動」としての特徴的な部分を意識して、これを高める活動の継続と発展が期待される。一方、大田区にはまだまだ魅力あふれる景観まちづくり活動は各地で行われているにも関わらず広く知られていない。今回の応募では、自薦がやや少なかったこともあり、ぜひ、積極的に大田区らしい景観を育む豊かな活動を展開し、次回以降の応募へとつなげていただきたい。

（委員：野原 卓）